

いのち 生命を

ささえる

薬剤師

超高齢社会は、認知症患者や独り暮らし世帯の増加など、疾病構造や家族形態に変化をもたらした。それに対応し、医療や介護の提供体制の改革が進められている。

その中で薬剤師は、高度な専門知識とコミュニケーション能力を発揮し、他の職種との連携を推進し、人々の健康な暮らしを守るために日々研鑽を積んでいる。

ここでは、二組の薬剤師と医療者との姿を通して、人々の生命をささえる薬剤師の姿を紹介する。



看護師
石原 喜和子さん
福山市医師会
訪問看護ステーション管理者



薬剤師
平田 恭洋さん
ファーマシー薬局
春日在宅ケア



医師
丸山 典良さん
まるやまホームクリニック
院長

在宅医療にかかわる

—— チーム一丸となって、最期を迎えるまで

療養生活をサポートする ——

自宅で最期を迎える患者をサポートする在宅緩和ケアチーム。最期は家族と一緒に自宅で過ごしたいという患者の要望をかなえるため、薬剤師は、心身の苦痛に耐えながら療養生活を送る患者に対して医師や看護師、ケアマネジャーなどと連携を図り、よりよい医療の提供に努めています。まるやまホームクリニック院長の丸山典良さんとファーマシー薬局春日在宅ケアの平田恭洋さん、そして福山市医師会訪問看護ステーション管理者の石原喜和子さんに在宅緩和ケアの現状、薬剤師の役割などについて伺いました。

自宅で最期を迎える患者をサポートする在宅緩和ケア

丸山典良さん(以下丸山)：緩和ケアは、特定の病気を指すわけではありませんが、例えばがん、心不全、呼吸不全のような生命を脅かす重い病気を持った方

の身体的痛みを和らげるとともに、患者や家族の心理面もサポートする医療のことです。

初診時は、病状が急変して意識が戻らなくなり、自分の意思で何か決定することができなくなった場合に備えて、元気なうちに延命治療や受けたい医療・受けたくない医療などについて、



丸山典良(まるやま・のりよし) ●広島県尾道市御調町で約20年間地域包括ケアシステムを学び、2010年4月、広島県福山市に在宅医療に特化した診療所「まるやまホームクリニック」を開設。医療・介護の多職種連携を軸に、患者さんとご家族の意向に沿って、看取りまでを視野に入れた在宅医療の提供を目指している。

患者・家族と話し合い、最善のケアを決めていきます。そこには、医師をはじめ、歯科医師、薬剤師、看護師、ケアマネジャー、メディカルソーシャルワーカー、ヘルパーなど、多くの職種が参加しており、チーム全員が情報共有することで、より質の高い医療・介護サービスが提供できる体制を整えるのです。例えば、症状が急変した場合、病院に搬送するのか、自宅に対応するのかといったことを事前に決めていきます。



丸山典良(まるやま・のりよし) ●広島県尾道市御調町で約20年間地域包括ケアシステムを学び、2010年4月、広島県福山市に在宅医療に特化した診療所「まるやまホームクリニック」を開設。医療・介護の多職種連携を軸に、患者さんとご家族の意向に沿って、看取りまでを視野に入れた在宅医療の提供を目指している。

チーム医療は情報共有が不可欠

丸山 在宅医療において、医師が訪問診療する回数は限られているのが現状です。そのため、薬剤師や看護師から得られる情報は有益です。痛みが軽減しない場合は、看護師からの身体状況に関する情報、薬剤師からの医療用麻薬の処方提案を考慮して、治療法を決定することも少なくありません。繰り返しになりますが、日々刻々と変わる患者の状態をケアするためにチームで関わることが重要で、誰一人欠けてもいけません。

石原 現場ではたくさんさんの薬や医療機器などがあり、特に処方変更になった際、剤形や処方量が変わるので、不安になることもあります。その点をサポートしてくれるのが薬剤師。ケアしている中で、薬が飲みにくくなったり、皮膚の状態が悪くなったりした時に、何か



平田恭洋(ひらた・やすひろ) ●薬学部を卒業後、在宅医療にかかわり、チーム医療の重要性や在宅医療における薬剤師の役割について学ぶ。定期的に在宅チームが集まる「在宅定例カンファレンス」の幹事としても活躍している。

薬剤師

石原喜和子さん(以下 石原) 看護師の役割は、医療の部分と生活の部分、両方の視点から患者が希望するその人らしい暮らしを支えること。医療の部分では病状の把握、日頃の健康チェック、医療的な処置をします。生活の部分では、患者の食事や排泄、清潔の部分をサポートしています。在宅で生活するためには、病院と違い、患者や家族はいろいろな不安を抱えており、そ

者の生活があつていろいろなものが見えてきます。さまざまな話をする中で、単に患者と家族という関係ではなくて、人と人とのつながりができ、信頼関係が構築されます。すると、地域全体を見ようという意識が芽生え、地域をなんとかしようという行動につながると思います。薬の専門職としてチーム医療に参画するのはもちろんのこと、薬以外のこと、例えばアドバンスケアプランニング(終末期を含めた今後の治療・療養について患者・家族と医療者があらかじめ話し合うこと)の普及啓発であるとか、ボランティアの養成であるとか、社会的な活動にもチャレンジしてほしいですね。

丸山 在宅は病院と違い、電子カルテを見てもすぐに患者の治療計画や体の状態を把握することはできませんし、医療者がいつもそばにいるわけではないので、手厚いケアもできません。それを補完するのが、チーム医療であり、チーム内で緊密な情報共有をすることが重要です。平田 情報共有に関しては入院時にも鑑別に1時間くらいかかっています。それを解消するために、薬の用途や数を示した一覧と、薬を一つのバックにまとめたものを入院する患者に手渡して

丸山 福山市では、「在宅どうしよう委員会」を10年前につくりました。医師、薬剤師、看護師、ケアマネジャーを含めた介護系のスタッフから構成され、今では毎回100人前後集まる会までになりました。顔の見える関係をつくるだけでなく、福山市の在宅医療・介護の標準化も図っていきたくと考えています。

石原 さまざまな職種からの話が聞けるので、広い視野で物事を見られるようになりました。いろいろな現場で顔を合わせることで、一緒に仕事をする際も連携が取りやすいく感じています。平田 薬局の中だけにいるとわからない話もありますし、情報交換の場として有益な場だと思えます。また、会が円滑に進むように薬剤師が事務局の運営を行っています。

丸山 高齢化率が高まってくると、在宅業務が主体になるかもしれません。在宅医療にはほとんど外に出ていってほしいということが一つ。在宅に行くと思

薬剤師は社会的なことに挑戦してほしい

丸山 在宅医療ではたくさんさんの薬や医療機器などがあり、特に処方変更になった際、剤形や処方量が変わるので、不安になることもあります。その点をサポートしてくれるのが薬剤師。ケアしている中で、薬が飲みにくくなったり、皮膚の状態が悪くなったりした時に、何か

丸山 在宅医療において、医師が訪問診療する回数は限られているのが現状です。そのため、薬剤師や看護師から得られる情報は有益です。痛みが軽減しない場合は、看護師からの身体状況に関する情報、薬剤師からの医療用麻薬の処方提案を考慮して、治療法を決定することも少なくありません。繰り返しになりますが、日々刻々と変わる患者の状態をケアするためにチームで関わることが重要で、誰一人欠けてもいけません。

看護師



石原喜和子(いしはら・きわこ) ●呉共済病院看護専門学校卒業後、呉共済病院、福山市民病院の勤務を経て、2008年に福山市医師会訪問看護ステーションに入職。福山市慢性疾患児童等地域支援協議会、福山・府中地域保健対策協議会 在宅医療・介護連携会議などに参画し、チーム医療の一員として活躍している。

丸山 在宅医療ではたくさんさんの薬や医療機器などがあり、特に処方変更になった際、剤形や処方量が変わるので、不安になることもあります。その点をサポートしてくれるのが薬剤師。ケアしている中で、薬が飲みにくくなったり、皮膚の状態が悪くなったりした時に、何か

看護師



鈴木里恵（すずき・りえ）●新卒で帝京大学ちば総合医療センターに入職。ICU（集中治療室）勤務の時に褥瘡の患者に多く出会い、もっとしっかり治療・ケアできる力を身につけたいと、専門研修機関で1年間勉強。2007年に皮膚・排泄ケア認定看護師を取得した。

る基剤を選びます。

薬剤師は、大学で製剤学を学び、実際に軟膏やクリームをつくる実習をしてきています。皮膚科や形成外科の医師は、もちろん診療の中でそうした剤形選びのスキルは積んでいます。基剤について専門教育の中で学ぶのは薬剤師です。こうした科学の視点から、薬効

以外の部分も含めて薬をみることできますし、その視点を持って治療に参加することで、褥瘡治療の効果を上げることができるとのことです。

鈴木：基剤も含めて、薬は進歩しているの、最新の情報を共有できるのも助かっています。医師も「飯塚さんが言っていた薬を使ってみよう」と言



病棟で患者の状態を確認する飯塚さんと鈴木さん



勉強会の様子



勉強会の様子

うことがあり、飯塚さんからの発信があつて、この病院の褥瘡治療のスタンダードが決まっていくなような側面もあります。

飯塚さんは地域のネットワークづくりに熱心で、市中の薬局の薬剤師との連携もとってくれています。退院後も病院で行った治療を続けられるのは、退院後に利用できる薬局に患者情報を伝えて協働できる薬剤師の力も大きいと思います。

勉強会を立ち上げ 地域全体の褥瘡治療の質を上げる

飯塚：褥瘡は、患者本人が痛みがあつて苦しいことはもちろん、傷が深い時は見た目によるショックも大きく、家族が自責の念を抱えてしまつこともあります。生活の質への影響も大きく、メインの疾患の治療の妨げになる可能性もあり得ます。とても重要な疾患なのです。

在宅医療も増える中、地域全体で褥瘡に対する意識を高め、治療の質を上げる必要があります。そこで、6年ほど前に、市原市、茂原市、長生村の3自治体の医療職を集めた勉強会「褥瘡ゼロの会」を立ち上げました。多職種が集ま

り、お互いの専門知識・技術を学び合う機会にしています。

鈴木：飯塚さんがこの病院に来る前から、この勉強会で知り合っていましたので、飯塚さんがこちらに来てくれると聞いた時には、「頼りになる人がくる！」と、心強く思いました。

動画配信やe-ラーニングを活用して「褥瘡ゼロの会」を発展させていく方法を一緒に考えて、一人でも仲間を増やしていきたいですね。

飯塚：地域の薬局薬剤師に向けて、褥瘡回診に同行できる研修も開催しています。また、褥瘡治療やケアについて、勉強会を開きたいといわれれば、どこにでも出向いていきます。病院内の治療や予防の質を上げることももちろん、地域全体の活動にも、より力を入れていきたいと考えています。

